

第一日曜日
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～
その他の日曜日
教会学校 9:00～
聖書を読む会 9:00～
主日礼拝 10:30～

日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2020 (令和2年) 3. 8

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

祈祷会
第2日曜日 礼拝後
成人会
第3日曜日 礼拝後
婦人会
第4日曜日 礼拝後
教会附属 南部坂幼稚園

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

「この病気は死で終わるものではない」

牧師 松谷 祐二

ヨハネによる福音書 第二十一章一～二節

ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。それから、弟子たちに行われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」弟子たちは言った。「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまづくことはない。この世の光を見ているからだ。しかし、夜歩けば、つまづく。その人の内に光がないからである。」こうお話しになり、また、その後で言われた。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」

(新共同訳聖書)

教会暦では受難節に入りました。イエス・キリストの受難と死を覚えるようにと考案された期間です。そしてわたしたちは今しも、新型コロナウイルス感染症による混乱と不安の中にあります。こうしたことを念頭に置きながら、右の聖書の言葉に聞きたいと思います。

ユダヤ地方、エルサレムに近いベタニア村に住むマルタ、マリア、ラザロという姉妹・兄弟は、イエス様の「愛しておられる者」でした。その一人、ラザロが病気だということで、姉妹は使者を立てて、イエス様に来てもらおうとします。もちろん

ん、病気を治していただけると信じてのことです。この時イエス様は、ユダヤ地方を離れておられました。弟子たちの言葉によれば、「ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとした」という危険な情勢だったからです。使者が旅をしてイエス様を見つけ出すだけで、数日を要したと思われまます。

しかし、ラザロの病の報を受けたイエス様は、なぜか行こうとせず、「なお二日間同じ所に滞在され」ました。そして、不思議なことを仰っています。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」

二日たつてからイエス様は、ユダヤに、ラザロのところに行こうと弟子たちに告げます。しかも、「わたしたちの友ラザロが眠っている」、つまり死んでいる。「しかし、わたしは彼を起こしに行く」というのです。

話はその後、イエス様がベタニアに到着し、マルタ・マリアの姉妹と対話した後、すでに死んで墓に葬られて四日もたっているラザロを復活させる、という展開を見せます。

そうしてみると、「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである」というあのお言葉の意味は、「ラザロは病気で死ぬが、わたしが復活させる。死んだ者をも復活させる神の力を信じて、神の子が栄光を受ける（そのすばらしさがたたえられる）ためだ」ということだったのでしようか。

確かにそういう解釈もあり得ます。ただ、奇跡を見せるために、ラザロが死ぬまで待った、ということだとすれば、倫理的にどうなのでしょう。わたしたちの時代の病の流行や災害にも、イエス様はあえて静観し、距離を取っておられると考えなければならぬのでしようか。

別の解釈のほうが良いように思います。ヨハネによる福音書でイエス様は何度も「神の栄光」「神の子が栄光を受ける」といったことを口にされますが、それは、自分が人々から拍手喝采され、

賞賛されるという意味ではありません。わたしたちの常識では考えられないことですが、イエス様は、ご自分が十字架につけられて死に、復活して、天に上げられる、それが「神の栄光」があらわれること、「神の子が栄光を受ける」ことだと考えられておられます。

イエス様の十字架の死は、わたしたち人間の罪が神から赦されるために、神の子が代償、犠牲となって死ぬ死です。このために自らの命を捨てるイエス様こそ、神は愛し、復活させ、天にまで引き上げてくださいます。それによって、死によっても奪われない、神と共にある永遠の命の確かさが分ります。この十字架・復活・昇天においてこそ、イエス様をキリスト、神の子と信じるすべての人に救いの道が開かれ、永遠の命が与えられるようになります。だからそこで「神の栄光」があらわれるのです。

病気の報が届いた時、イエス様は、ラザロがもう死んでしまっていることを悟ったのだと思います。それで、「この病気は死で終わるものではない。：」と言われた。この病気は、このままならば死で終わる。しかし、恐れることはない。このわたしが、神の子が、十字架の死によって始まる栄光を受けようとしている。神の栄光があらわされようとしている。それが成れば、この病気もはや、死で終わるものではなく、人が神の栄光を見られる、救いの機会とさえなる。神の子を信じる者に与えられる、永遠の命が続くからだ。永遠の命が、死をも凌駕するからだ。——そのように、イエス様は仰りたかったのではないのでしょうか。そして、このメッセージを見える形に示されたのが、イエス様がラザロを墓からよみがえらせた出来事だったということです。同時にそれは、イエス様ご自身の死と復活の予告劇でもありました。

わたしたちが恐れている病のこと、災害のこと、その他多くの悩みや苦しみをも、イエス様はつぶさにご覧になり、そして言ってくださいませ。それが「それは死で終わるものではない。神の栄光のためである」と。

長老研修会報告

六戸 信次郎

東京改革長老教会協議会の二〇一九年度長老研修会が二月十一日(火・祝)飯田橋の富士見町教会にて行われ、参加してまいりましたので、ご報告させていただきます。

当日は、柿の木坂教会の渡邊義彦牧師により礼拝を守ったのち、東京神学大学名誉教授の近藤勝彦先生の「伝道―教会になくてならない方として―」という題で講演をして頂きました。

近藤先生は、ローマの信徒への手紙十二章九節〜二十一節を引き、伝道について、お話しされました。

福音書は、どの福音書も最後は、復活された主イエスが弟子たちを伝道に遣わす記述で終わっている。これは伝道命令ともいえるもので、弟子たちを証人として世に遣わして、福音を伝えさせることが、イエス・キリストにおける神の意志として理解されなければならない。教会は本質的に「伝道する教会」である。教会のための伝道でもなければ、教会が中心である伝道でもない。ただ、神の国のために、礼拝し、伝道する。礼拝は、神を神として礼拝するものである。「神を礼拝し、人に伝道する」。これが教会の使命です。

伝道のために教会があることは、久しく忘れられていました。十二・三世紀にヨーロッパ地域の伝道はほぼ全域に達している、未信者の地域への伝道は終了していると思われたためです。プロテスタント教会が世界伝道を回復したのは、十八世紀になってインド伝道を行い、やがて十九世紀に「世界伝道の世紀」を迎えてからです。

カトリック教会は宗教革命ののち、イエズス会によって世界伝道が進められました。伝道の真の主体は神です。神は、失われた民を探し出す神です。キリストのたとえ話が示すように、神は「一匹を見つけたら探し回る」お方であり、そして「まだ遠く離れていたのに、見つけて、走り寄って首を抱き、接吻される」お方です。放蕩息子の話の主題は父親なのです。

伝道の基盤として信仰告白があります。なぜなら、伝道は洗礼に導きますが、洗礼は信仰告白を伴うからです。教会のすべての営みが伝道の側面を持つていることも重大です。そのことは説教や祈りにも表れます。伝道のプログラムを有効に、そして新鮮に実行していくために、常に祈って、検討を加え続けなければならないでしょう。信仰を与えられていない人々を迎える姿勢や工夫が不断に必要です。入りやすい教会を、受付を含めて、初めての人の目線で点検する必要があるでしょう。伝道する教会は、愛をもって互いに支える教会であるはずです。そのために長老として任命された人には、神の召しに対する信仰と、信仰による謙遜、そして愛と奉仕が求められます。

近藤先生は一時間半以上、熱く語られました。時間があつたら、もつともつとお話をして頂けそうな勢いでした。お話を伺いながら、昔、先生に、君達の教会は扉からすぐに礼拝堂となる、素晴らしい教会だ、と言われたことを思い出しました。

午後は、五つの分団に分かれ、牛込弘方町教会、柿の木坂教会、中渋谷教会、洗足教会、富士見町教会の方々とそれぞれの教会の課題について話し合いました。会堂改築中の教会、準備をしておられる教会もあり、話が絶えることはありませんでした。渡邊先生をはじめ、柿の木坂教会の懐か

しい方々ともお話ができ、渡邊牧子さんが今は教会学校で大活躍されていると聞き、とても嬉しかったです。

報告

*二〇二〇年三月一日(日)、教会設立百周年記念礼拝と愛餐会を行う予定でしたが、新型コロナウイルスの影響を考慮して延期し、流行が落ち着いてから、二〇二〇年度内に改めて行うこととしました。
*二月二十四日(月)の十三時半〜十七時に鳥居坂教会にて行われる予定でした「西南支区伝道フォーラム」(当教会としては教会修養会)は、新型コロナウイルスの影響で中止となりました。

各部報告 二月度

成人会

日時 二月十六日 主日礼拝後
場所 教会堂会議室
出席者 四名
開会祈祷 佐藤忠昭兄
内容

◇創世記 三十七章〜四十一章
ヨセフの夢が兄たちの恨みをかい、エジプトの商人に売られ、看守長の奴隷とされた。看守長の妻の逆恨みをかい投獄されるが、夢を解くことができることで、ファラオの夢を解くことを要請された。その夢は大飢饉の予告であり、災害への対策を命じられ、同胞や異邦人を救うことが出来、王に次ぐ地位を与えられた。神を信じ、啓示を与えられ、預言者としての洞察力を与えられ、全てを神に任せてご計画のもとに生きてきたヨセフの姿がある。

婦人会

◇次回 三月十五日 四十二章より
次回司会 菊池才知子姉
閉会祈祷 全員黙祷

日時 二月二十三日 主日礼拝後
場所 教会堂会議室
出席者 六名
開会祈祷 菊池才知子姉
閉会祈祷 各自順次小祈祷
内容

一、聖書研究「サムエル記 上」
二十五章、二十六章
二十五章 サムエルを葬った後、ダビデはまた荒野に降った。マオンの裕福な男ナバルにダビデは使者を送り、礼を尽くして支援を要請した。ナバルはダビデを侮辱し支援を拒否したが、ナバルの妻、アビゲイルは食料を用意し、ロバに積んで出発した。サムエルという助言者失ったダビデに主は助言者としてアビゲイルを遣わし、ダビデが夫を打つことを諫めた。主はナバルを打ち、彼は死んだ。ダビデは聡明なアビゲイルを妻とした。
二十六章 ジフ人がサウルにダビデの居場所を告げた。サウルが自分を追って荒野に来たことを知ったダビデとアビシヤイは、サウルと兵士たちが眠っているところまで近寄ったが、主に対する畏敬を忘れないダビデはサウルの命は主にお任せすることに、サウルの枕もとの槍と水差しを取って立ち去った。サウルは再びダビデと和睦し別れた。
次回 三月二十二日「サムエル記 上」
二十七章〜二十八章まで
二、「信徒の友」購読継続を決定
三、西南支区婦人部および東京教区伝道部婦人委員会からの通知を報告